

資料1-2 令和5年9月29日（金）  
第10回 魅力ある新国立公文書館の展示・  
運営の在り方に関する検討会

# 台湾視察報告

実施日	視察先	出席委員
令和5年7月15日	故宮博物院・図書館	田中座長 川島委員
令和5年7月16日	順益台湾原住民博物館	
	二二八国家紀念館	
令和5年7月17日	国家発展委員会档案管理局	
	国史館	
令和5年7月18日	中央研究院近代史研究所档案館	川島委員
	国立政治大学（達賢図書館・中正図書館）	

# 国家发展委员会档案管理局

---

日 時：2023年7月17日 9:15~12:30

場 所：新北市

說明者：陳氏（副局長）

連氏（企画組 副組長）

陳氏（檔案徵集組 組長）

涂氏（檔案典藏組組長）

楊氏（應用服務組 組長）

李氏（文書檔案資訊組 組長）

許氏（秘書室 主任）

簡氏（人事室 主任）

---

## 基本情報

- 1999年に国家档案法が制定公布され、これに基づいて台湾の档案（公文書にあたる）を管理するために2001年に組織された国家档案局が前身。2014年に現在の国家発展委員会国家档案管理局となった。行政院の下部組織。
- 現在、行政機関が入居する合同庁舎の中に位置し、オフィスのほか閲覧室、展示室、保管庫「国家档案庫房」、修復関連スペースが入居している。
- 2025年開館予定の新施設「国家档案馆」を新北市内に建設中。保管庫の拡張を目的とするほか、一般市民に開かれた施設となることをめざしている。



↑1階の閲覧室入口



↑1階の常設展示室入口。歴史上重要な档案をレプリカで紹介している。

## 現施設の企画展示

- 台湾の製塩業をテーマとした企画展を開催中。これまでは档案そのものを展示する企画展が多かったが、より档案を身近に感じてもらうため、モノ資料を活用してよりビジュアルを見せる展示方法に変えた。
- 展示している档案は、製塩業が国営であったという歴史を示す档案3点のみ。この3点をキーに、塩づくりの様子、道具、技術などについて解説する展示を構成している。
- 来館者が自身のスマートフォンを使い、QRコードをスキャンすると、キャラクターが展示室内のガイドを行うというAR技術を活用した解説を行っている。



↑ 製塩会社から資料を借用し、展示



↑ 実物資料や子どもがくぐれる造作などを展示



↑ AR技術を活用した展示ガイドの案内

# 新施設・国家档案馆について

## ①開発方針

- 国家の記憶の完全なアーカイブ
- 国家の記憶に関する最も権威ある研究センター
- 誰もが必ず訪れる国家の記憶学習センター
- 国家の記録保存のための技術研究開発センター

## ②新しい展示の考え方

- 設定する展示テーマに沿って、ARや没入体験の提供を予定している。
- 移行期正義に関する档案を紹介するなど、一人ひとりの档案への理解を深めることをめざす。

※移行期正義 = 権威主義体制から民主化する際に、権威主義体制下で政府が行った人権侵害について、政府が事実解明と謝罪、補償を行う行為

- 常設展示は台湾の人々に密接につながるテーマを設けて展開する。
- 幅広い年齢層、障がい者などへも対応できる汎用的なスペースとする。
- 音声案内、多言語対応、オンライン展示も計画している。
- 公文書の応用や展示に詳しい人材の採用を検討している。



Concept image showing the National Archives main entrance

画像出典：国家発展委員会檔案管理局



Concept image showing the National Archives display area

画像出典：国家発展委員会檔案管理局

# 国史館

---

日 時：2023年7月17日 13:00~15:30

場 所：台北市

說明者：許氏（副館長）

黃氏（秘書處）

邱氏（審編處）

陸氏（采集處）

譚氏（修纂處）

周氏（主任秘書）

---

## 基本情報

- 歴史研究や編纂、歴史資料・図書の収集、整理、公開を行っている、総統府に直属する機関。台湾の歴史研究、総統・副総統の文物、機関档案、歴史資料を所蔵している（国家档案法の施行までは、行政院管轄の大半の部局の档案が移管されていた）。国史館組織条例と総統副総統文物管理条例に基づいて運営を行っている。
- 1947年に南京で設立した後、1957年に台湾の南京東路で再建。その後、1973年から台北近郊の新店に移転。2010年に現在の台北市内へ移転した。現施設に移転してから展示活動を行っている。
- 総統・副総統の文物は、日記、講演記録、外国からのギフトなどが含まれ、総統府から国史館に定期的に移管される。
- 施設内は、档案を閲覧できる台北閲覧室、保管庫、展示室などで構成されている。



↑ 台北閲覧室（国史館パンフレットより）



↑ 総統・副総統に贈られた海外からのギフトが収蔵されている

## 企画展示

- 「台湾における歴史上の選挙」をテーマとした企画展を開催中。
- 日本統治時代、戒厳令の時代、自由選挙の時代と時代ごとに展示室を分け、空間の色を変えて時代の雰囲気を伝えている。
- 展示室の中央に、壁面と床面に映像を投影する没入型シアターを設け、選挙の歴史に関連する事件を解説する映像を流している。
- 展示の企画や解説文の執筆は館内で行い、展示の設計やビジュアルづくりは外部のデザイナーに委託している。



↑ 戒厳令の時代の展示室は壁面を暗い色で展開



↑ 自由選挙の時代の展示室は明るい雰囲気



↑ 選挙の歴史に関連する映像を没入型シアターで投影



↑ 企画展での文書展示



↑ 文書のみでなく、選挙会場の再現やモノ資料等の展示も行っている。





# 中央研究院近代史研究所檔案館

---

日 時：2023年7月18日 9:00~12:00

場 所：台北市

說明者：坐氏（副所長）

張氏（主任）

張氏（兼任研究員）

蕭氏（編審）

蔡氏（助理）

王氏（助理）

---

## 基本情報

- 中央研究院近代史研究所設立の際に、政府から移管された外交部と經濟部の檔案を保管するための檔案館を1958年に設立。個人や団体からの寄贈資料も所蔵資料の一部であり、歴史的に重要な人物の資料や、政府機関や政党の資料などを持つ。
- 研究機関であるため、研究者をサポートすることが第一義としてあり、所内の研究テーマに沿って資料収集を行う。檔案管理局が組織されてからは、政府資料ではなく、個人資料の収集に力を入れている。
- 施設内は、修復室、閲覧室、保管庫で構成されている。展示室は無いが、研究所のオープンハウスで使用したパネル展示を廊下に掲示している。



↑修復室



↑パネル展示。檔案の画像とともに、写真を活用したグラフィック展開



↑パネル展示。檔案に押された各政府部門の印章を紹介

(參考資料)

故宮博物院・圖書館

順益台灣原住民博物館

二二八國家紀念館

## 故宮博物院 図書館

- 故宮博物院の図書館は本館に隣接した建物に入居し、図書と档案を管理していたが、2021年に敷地内の現施設に移動、図書のみを扱うようになった。档案は故宮の本院書画文献処が文物として管理している。
- 第一図書館、第二図書館の2棟に分かれている。スペース拡張のため、隣接地に新館を建設中である。
- 「満州語大蔵経」のレプリカ、「チベット語大蔵経」の写本、清朝乾隆年間の「四庫全書」関連書籍、美術品オークションカタログが同図書館の特徴的なコレクションである。



↑ 第一図書館：開架スペース



↑ 第一図書館：「チベット語大蔵経」写本



↑ 第二図書館：書架、閲覧スペース

# 故宮博物院 本館

- 各展示室での実物展示のほか、デジタル体験展示や空間の中に自分がいるように感じる映像など、最新技術を活用した展示も行っている。
- 入口すぐの無料ゾーンに「チルドレンズギャラリー」を設置。触れる展示やAR技術を活用した体験展示を設置している。



↑ 故宮博物院のコレクションを紹介するデジタルウォール。画像にタッチすると、そのコレクションの拡大画像とタイトル、どの部屋で見ることができるかが表示される。



↑ 展示室と展示室の間に設置されたフォトスポット



↑ チルドレンズギャラリー。中央に船の造形を設置。体験展示で故宮博物院のコレクションについて紹介している。



↑ 四季をテーマとした没入型デジタル展示（企画展）。照明やプロジェクションマッピングで演出した導入空間の次に、台湾の四季の風景を見せる没入型シアターを設置している。出口付近にもデジタル展示を展開。手元のリングを動かすと、ケース内の資料の拡大映像が目の前のモニターで映し出される。

## 順益台湾原住民博物館

- 台湾の企業家が自身のコレクションをもとに設立した、台湾の原住民をテーマとした私立博物館。1994年設立。故宮博物院から徒歩圏内に立地し、海外からの観光客にも台湾の原住民について紹介することをねらっている。
- 展示の構成は開館時から大きく変更していないが、コーナーごとにリニューアルを行っている。



↑ エントランスでの映像展示。地図を中心としたコンテンツとしている



↑ 原住民の住居についての解説。住居再現と解説映像、演出映像を組み合わせた展示としている

## 二二八国家紀念館

- 1947年に発生した政府による暴行事件＝二・二八事件と、その後起こった台湾人弾圧＝白色テロに関する展示を行う施設。事件の真相解明と謝罪・賠償を行うために設立された財団法人二二八事件紀念基金会（行政院の下部組織）が運営。



↑ 二・二八事件発生の背景を説明した後に、事件の内容を解説する、ストーリーを重視した展示構成



↑ 新聞報道などの文字を象徴的に見せる展示デザイン



↑ 被害者の数を示すための、被害者一人ひとりの档案（複製）を集積して見せる展示。一部、来館者が手に取ってファイルを見ることができる。

## まとめ

### (展示の考え方)

- 権威主義体制から民主主義への移行期正義において、過去の再検証に公文書は極めて重要
- 移行期正義の考え方を踏まえた展示（※）により、内にも外にも「台湾」の「歴史」と「現在」を発信

※ 日本の植民地時代、国民党一党独裁政権時代、民主主義の現在の「思い切った」対比を通じて、現在の「台湾」が過去をどう捉え、評価しているかが分かる

### (展示の方法)

- 展示物（公文書）を見てもらうというよりも、取り上げたテーマについての理解を促すために必要なもの（パネル、モノ、写真、公文書など）で展示を構成
- 公文書の展示ではなく、公文書は展示の一つ